自由研究発表

マラプ信仰教育の誕生
－東スンバ社会におけるマラプをめぐる動き－
The Emergence of Marapu Belief Education: Movements around Marapu in Eastern Sumba Society

小池誠（桃山学院大学）
KOIKE Makoto（Momoyama Gakuin University）

東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ県に焦点を当て、固有のマラプ信仰（kepercayaan marapu）を続けている少数派のスンバ人が直面する問題に対して、どのような改善の動きが進んでいるのか、明らかにしたい。マラプは狭義には「祖先、祖霊」を意味するが、スンバ人は自分たちの信仰全体をマラプと呼んでいる。今回の発表ではとくに公教育の分野における「マラプ信仰教育」の動向に注目する。1980 年代から宗教と信仰の問題に関してはインドネシア研究で活発に議論されているが、国家と地域社会だけでなく国際社会も視野に含めて、この複雑に入り組んだ問題に取り組みたい。2024 年 8 月に東スンバ県の県都ワインガプでマラプ関係者から聞き取った成果も分析に加える。

現代インドネシアにおいてグローバルな価値観（キーワードは人権・平等・インクルージョン・多様性）が全国的 NGO の活動を通して広まるなか、2016 年の教育文化大臣令によって現代的価値観を踏まえた信仰教育（Pendidikan Kepercayaan Terhadap Tuhan Yang Maha Esa）の制度化が始まった。これを担うのが唯一神信仰・慣習社会局（KMA）である。政府の上からの政策と、国際的 NGO の援助を受け地方 NGO が始めた伝統の再活性化を目指す活動の接点から東スンバでも、地域社会で継承されてきたのとは少し異なる「マラプ信仰」が生まれた。その動きの中心には、自分の意志でプロテスタントから「マラプに戻った」マランバ（*maràmba*：貴族）がいる。

「マラプ信仰」を中央が定めた教育カリキュラムの枠組みに合わせようとした結果、儀礼中心の宗教実践からかけ離れた「マラプ信仰の創造」になったという否定的な解釈も成り立つ。しかし、マラプ信仰の当事者にとって「信仰教育」は自分たちの復権につながる重要な一歩となっていることを結論として述べたい。

パネル発表用　応募票

パネルタイトル
ーサブタイトルー(あれば)
Panel title（英語）：Subtitle（英語）

趣旨説明
About the Panel

パネル責任者名→山田　花子（所属）
YAMADA Hanako（所属英語名）

以下にパネルの趣旨説明を MS 明朝、11 ポイントのフォントサイズで入力してください。800 字程度でお願いします。文献等を引用する場合は、文献リストを含みます。

発表者
(1)氏名（所属）：発表タイトル
(2)氏名（所属）：発表タイトル
(3)氏名（所属）：発表タイトル

※パネル責任者は必ずしもパネル内で発表をしなくてもかまいません。
※発表人数に応じて、全体で 80 分または 120 分の時間枠が配分されます。
※このページに続けて、各発表者の発表要旨を 2 ページ目のフォーマットを用いて作成してください。